
サイクル

蒼際

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイクル

【Nコード】

N5356A

【作者名】

蒼際

【あらすじ】

この世には『蟲』と呼ばれる人の内に寄生している鬼の因子の存在がある。蟲は繁殖、移植を繰り返して仲間を増やし、人間を殺す。その蟲に対抗する者達。狩人と呼ばれる者達の存在も出てきた。

スクリーン

エピソード

中に蠢く虫と書いて、蟲という字があります。

蟲の一字の『中』とは人の体の内。

虫とは中で蠢く寄生虫『鬼の因子』にてございます。

蟲は蟲を呼び、一つの人の内に繁殖、最後には他の人の内に移植されます。

>>1<<

夜中の都心のある路地裏に響く走る足音。

追われる足音に、追う足音の2種類……アスファルトの地面に響く。

追われる足音が突然止まり、追う足音だけになる。

行き止まりの壁の前に立ち止まるのは、齡27歳くらいの女性。

女性の息は小刻みに吸ったり吐いたり、すこし過呼吸だ。

追う足音が、女性の後ろで止まり、壁に黒い影が映る。

女性は振り返る。振り返った先には灰色のレインコートを頭から全身に被った身長150センチ程度の人が立っている。

「追いかけてこはこれで終わりにしよう……面倒だ」

細くすこし高い声は少女のモノだった。レインコートを被った少女？はそう愚痴を零すような口調で言うと、片手にスパークしているスタンガンを出す。

威圧感が路地裏の空気を支配して、女性は息を呑んで一歩だけ後退する。

一歩、一歩ずつ後退する女性に対して、レインコートを被った少女？は女性に向かって一歩ずつ前進していく。

バチバチ！片手に持つているスタンガンのスパークする電流の音がとてもよく聞こえる。

「何で私が殺されないといけないのよ？何も悪い事してないじゃないの！」

必死の女性の弁解。殺される恐怖で理性がなくなっただろうか。うるさい奴だな。レインコートを被った少女？は五月蠅いと感じると、一回だけ強くスタンガンの電流をスパークさせて、女性を黙らせる。

「人間殺したろ？だから私がお前を殺すんだよ。蟲」

「仲間を増やしてただけでしょ！？それに、人間なんて」

家畜でしょ？。女性の言葉の続きをレインコートを被った少女？が言う。

「その家畜に殺される気分はどう？反撃してもいいけど、すぐに動けなくなるんだから無意味な行為だけだ」

レインコートを被った少女？は女性まであと90センチ程度まで歩みを進める。

女性の体に高圧電流が流れる。素早くスタンガンを首に突きつけられた。

再確認は出来ない。電流が体の神経や筋肉を麻痺させて、動けない。

ここで殺される、私はここで死ぬ。女性の思考はそれだけで埋められている。

女性はその場に崩れ落ちるように倒れ、レインコートを被った少女？は倒れた女性の側頭部を黒い紐靴で踏みつけて、押し当てる。

優越感に浸れる状況だ。レインコートを被った少女？からは不思議と笑いが零れる。

すこしの間優越感もどきに浸っていると、コートの中から釣りのリールのような機械を取り出して、釣り糸ではない黒く細いワイヤーを伸ばして女性の首に巻きつける。

「本来は私の得物は刀なんだが、刀を持ち歩いていたら銃刀法違反

で警察に捕まるから、ワイヤーでその首切断する」

そう言つと、リールのスイッチを押して、ワイヤーを巻き取る。巻き取つていくリールを見ていた女性は青ざめた顔をして、恐怖か憎悪やらの感情が入り混じつたような表情の色を浮かべた。

浮かべた最後の顔が、女性の最後。高速で巻き取られていくワイヤーは女性の首にすこし食い込んで、一気に首を切断する。

バケツ一杯に入れた水を壁にでも思いつきりぶっかけたような音がした。

赤い血液は不規則に壁や地面を濡らし、地面に転がる首の目や口や耳や切断面からも赤い血液が流れ出ている。

もちろん、レインコートを被った少女？も返り血を浴びた。返り血を浴びたレインコートは灰色から赤に色を変貌させている。

返り血を浴びたレインコートをその場に脱ぎ捨てて。地面に落ちたレインコートは赤い血液の血溜まりに、波紋を発生させる。

レインコートを脱ぎ捨てたのは、20歳くらいの長い黒髪の少女。顔つきは成人女性みたいに美人だが、身長的には15、6歳くらいだ。

しばらく少女は血溜まりを見下ろしていると、黒いジーンズのポケットに両手をつっ込んで、歩き去る。

常人でも識別出来るような強い血臭が服に染み込んでいるため、少女は路地裏から路地裏へと歩き進み、闇の世界に溶け込むように消える。

>>><<<

4月27日の早朝6時半。

古い寺みたいな木造の廊下を歩くのは、昨日の少女。

灰色のすこし薄手のジャケットは釣りに行く人のジャケットと似ていて、左右に2個ずつあるポーチにはナイフなどがいろいろ仕込めそうだ。

黒いジーンズはすこし緩いため、ベルトで固定している。

ベルトの右側には、木造の鞘に収められた160センチ程の刀を帯刀していて、刀の柄は鞘と同じように木造だ。

すこし真っ直ぐに歩を進めていると、前に分岐している通路の片方から若い坊主頭の坊主が歩いてくる。

「雛菊さん、おはようございます」

坊主は少女を見るとすぐに両手を合わせ拝むように敬語で挨拶する。

「ああ、おはよう。お前、結構朝早いんだな」

言葉は関心しているようだが、口調は関心の一文字もなく、面倒そうだ。

坊主は挨拶の流れを止めずに、

「俺も早く狩人もなりたいです」

「お前には無理だ」

楽しそうな坊主に水を差す雛菊。雛菊の口ぶりは、何か警告でもしているかのようだ。

水を差された坊主は苦笑い気味で、その場から歩き去る。

坊主の後姿を横目で見ていた雛菊は、ふん、と鼻息を鳴らして、再び歩を進める。

まだ日の光が差し込んでないため、廊下は薄暗い。そのまま廊下を進んでいると、道場のような場所に出る。

広さは小学校の体育館の3分の2くらいの広さで、先客の数名が竹刀で打ち合いや、弓で端に設置されている的を射抜いたりしている。

素人ね。雛菊は竹刀で打ち合っている奴らを眺めながら、ポツリと批評する。

「何だ、来てたのか雛菊」

先客を観察するように入り口の壁際の立っていた30歳くらいの良い感じに軽く老けた男性が話しかけてくる。

「泰三が教えたの？素人同然にしか見えない」

雛菊は軽く蔑んで、評価を述べる。

俺の教え方が悪いって事か？。泰三はすこし痛いところを突かれたのか、苦笑する。

「俺の得物は刀でも弓でもないんでね。極意なんか知らん」

「極意なんかないよ。所詮は殺すための道具に過ぎないし」

「まあ、弓は必殺を前提にした武器って事は知ってるけどな」

矢は当たると痛いぞ。打ち合っている奴らから視線を的を射抜いてる奴に向ける雛菊と泰三。

的に矢が命中する時、とても良い音が体育館内に響く。
何度聞いても心地よい。

「私、今日は学校休んで待機しとくからな」

面倒そうに雛菊はそう言つと、泰三の横に腰を下ろす。

「ズル休みはすんなよ？というか、俺のレインコートはどこに片したんだ？」

「あれなら捨てた。返り血を浴びて汚れたから」

泰三の質問に冷静に答える雛菊。

あれ、高かったんだぞ？。ショッピングモールで1万3000円購入した灰色のレインコート……泰三は軽い精神ショックを受けて、その場にズルズルと腰を下ろす。

軽く落胆している泰三。雛菊は『みみっちい』と思うが、言葉には出さない。

「あーそういえば、雛菊が帰るすこし前に細長い小包が届いたぞ。中身は何なんだ？」

雛菊が帰ってきたのは夜中の2時頃。小包が届いたのは夜の9時過ぎの事。

2メートル程の長さの細長い小包は結構重かった記憶を覚えている泰三は、打ち合っている奴らに視線を向けながら雛菊に訊ねる。

あー。発音だけの言葉を伸ばしながら雛菊は軽く頭を片手で掻く。
「折リたたみ式の野太刀だったと思う」

何を注文したのか記憶が曖昧で、雛菊はすこし曖昧な答えを返す。
「折リたたみ式の刀なんてあるのか？」

『折りたたみ式の刀』すこし興味を注がれる言葉。同時に、そんな刀なんてあるのか？と疑問を感じてしまう。

しばらく待っていると、打ち合いをしていた奴らは体力切れで体育館の隅に座り、弓をしていた奴も指先でも痛めたのか、集中力でも切れたかで退散する。

体育館内が静かになると雛菊は立ち上がって、倉庫の方から太い丸太が固定されているトロツコを数台運んできて、真ん中でトロツコの車輪のブレーキを固定して動かないようにする。

雛菊は数歩後ろに下がり、重心をすこし低くしながら刀の柄を掴んで、鞘から引き抜く。

引き抜いた刀の刃先を床スレスレの高さまで下ろすように両手で構えて、床に接地している両足、特に軸となる右足に力を入れる。

精神統一……イメージするのは太刀筋だけで、他の事は一切考えない。

『一刀両断』一筋の太刀筋に全力を注いで、モノを一刀で両断する。

初斬はもつとも必殺に近い一撃だ。居合い何かが良い例えだ。

刀の刃の波紋はとげとげしい波打ち、切れ味はとても鋭そう。

柄を掴む片手の握りを強く直すと、カチャ、と音がする。

持ち直した次の瞬間、軸の右足を半時計回りに回転させるように踏み込んで、刀を丸太に向かって大きく横薙ぎ。

丸太の3分の1まで刃が入ると、体も大きく捻って刃の速度を上げる。

遠心力を加えた刃は面白い程に丸太を切断していき、体を捻りきる頃には刀の刃は丸太を横に両断する。

切断された丸太の上の部分は壁のほうまで勢い良く転がり、固定された丸太の切断面は綺麗な断面を表している。

よく切断出来るな。毎度の事ながら、丸太の両断には関心する。

「さすがは狩人：処刑台の仇名を持っているだけの事はあるな」
軽い拍手をしながら泰三は言う。

「五月蠅い。それに、好きで『処刑台』なんて仇名を持つてる訳じゃないし、どうせだったら『紅雪』の方がよかった」

雛菊は刀を鞘に戻しながら言葉を返す。

紅雪とは今帯刀している刀の名前で、処刑台なんて物騒な仇名なんかより数倍『紅雪』の方が良い。

「でも、あんな大振りで蟲なんて殺せるのか？避けられる事確かだと思うが」

泰三は雛菊の丸太切りの振り方を指摘する。泰三の意見ももっともだ。

実際にあんな大振りじゃあ必殺の可能性は薄いし、隙を突かれたら、最悪殺される。

「初斬だからこそ大振りしてんの。確かに一撃で倒す事は考えてるけど、隙を作らないと殺す機会が作れないし、それに相手はあまりの大振りに対して、疑心感を持つ事が多い」

帯刀していた『紅雪』をベルトから鞘事引き抜いて片手に持ちながら、雛菊は淡々とした口調で自分なりの実践論を述べる。

納得は出来るが、隙を突かれる確立の方が遥かに高い。

「まあ、俺には刀での実践論を聞いてもサッパリだ。というか、刀なんか持つてる時点で銃刀法違反だしな」

「なら、ワイヤーは違反じゃないのか？」

泰三の言い方にすこし頭にきた雛菊は泰三の隠し持っている細身のワイヤーを指摘する。

ここでワイヤーの話を出すか？泰三はポケットからタコ糸のような細いワイヤーを取り出す。

ワイヤーの長さは3メートルくらいで、泰三の人差し指と中指とほぼ同じ大きさの指輪にワイヤーが付いている。

「銃刀法違反の漢字に『糸』はないから大丈夫だろ？」

喋りながら、泰三は指輪を右手の人差し指と中指に嵌めると右手を丸太に向かって斜め右上に薙ぐ。

ワイヤーが空を切る音が幾つか聞こえると、丸太に幾つモノ切り

こみが入る。

ほら、刀より殺傷能力はない。泰三は一応狩人の一人。

仇名は『系の螺旋師』ワイヤーアクションの動きが螺旋に似ているため、そんな仇名が付いた。

「人は良く切れるぞ？ 見えないから刀よりある意味凶悪だし」

昨日、蟲を一人ワイヤーで首を切断した事もあってか、雛菊の言葉は芯が通り力がある。

「しかし、ワイヤーは怖いぞ？ 一歩間違えたら自分の体の一部が飛ぶからな」

泰三は経験者は語るように言いながら、さつきから空を切っていたワイヤーを後ろの壁にぶつけて動きを止めて回収する。

ワイヤーをぶつけた壁には痛々しい傷が2本刻まれている。

「私はワイヤーより『紅雪』の方が好きだな。本当に見れば見るほど綺麗」

「飾り気のない刀のどこが綺麗なんだ？ 理解出来ない」

「泰三は馬鹿だから理解出来ないだけなんじゃないの？」

今の雛菊の発言に頭にきた泰三。軽い怒りを感じるが、怒りは雛菊の頭の小突く事で済ませる事した。

「本当の事じゃないの！」

雛菊がまた言っと、さらに小突く。

「暴力魔」

さらに小突く。

「連続で小突かれると結構痛いのよ？」

雛菊は小突かれた頭を片手で押さえながら、瞳に薄っすらと涙を浮かべる。

これくらいで泣くか？ 普通……さすがに泰三は小突くのをやめて、困ったように頭を掻く。

頭が痛い。

やり返してやる。

そう思うと、雛菊は刀『紅雪』を鞘から引き抜く。

無言の威圧。

泰三は何も言わずに刀を構える雛菊に恐怖するように、一步後退する。

「小突き過ぎたのは俺が悪かった。謝るから刀はナシにしよう」
言葉には焦りが見える。泰三は必死になる。

「大丈夫……みね打ちで済ませるから安心して」

仮死状態になつて。

雛菊から威圧感と一緒に笑いが零れる。刀の構えは上段の構え。

泰三は雛菊の笑いを聞くと同時に悟った。

ここに居たら本当に仮死状態にされる。

そう思うと、全身からこんな汗出した事がないような汗が滲んできく。

「一つ積んでは父のため！」

雛菊は笑いながら意味不明な言葉を口走ると、刀を泰三の頭目掛けて振り下ろす。

泰三は持っていたワイヤーで刀を受け止めて、弾き返す。

「マジで冗談はやめろ！」

そう強い口調で言い切つて、体育館から逃げるように走り去る。

「二つ積んでは母のため！」

逃げる泰三に雛菊は刀を泰三の後ろ姿目掛けて投擲する。

刀は泰三の頬を掠めて、柱に突き刺さる。

柱に突き刺さった衝撃で刀の刃は振動している。

泰三は振動している刀を見た途端に、見えない殺意のようなモノを感じ取る事に成功する。

「雛菊！今の投擲は俺を殺す気満々だったよな！？」

「三つ積んでは姉のため、四つ積んでは私のため！」

逃げながら叫ぶように言う泰三に対して、雛菊は走る速度を緩めずに、柱に突き刺さった刀を抜き取つて、まだ意味不明な言葉を口走っている。

追いかけてこは終盤に近づいた。そんな言葉を空耳として聞こえ

た泰三の前に、行き止まりという名の壁が立ちふさがる。

道を間違えた。一瞬悔やんで、頭を思いつきり下に下げる。

今頭のあった場所が、刀の刃に切られる。

今のは本当にやばかったぞ!?

泰三はそんな思考を巡らすと、冷たい刃が頬に触れる。

寒気が走った、背筋凍った。

殺される前の人間はこんな感覚を覚えるのだろうか？

「やつと捕まえた。小突いた仕返しさせてもらうから」

不気味な笑い声と一緒に雛菊の言葉が聞こえた　体に衝撃が走って意識が霞んでいく。

最後に視界に見えたのは、精神異常者みたいな不気味な笑みを浮かべている雛菊の顔と刃が光る『紅雪』だった。

>>3<<

「刹那雛菊!」

高等学校の教室内。毎朝毎朝、出席確認をよくやる担任だ。

朝の教室は一番静かで、生徒達はみんな調子が本調子じゃない性でもある。

はい、面倒そうにすこし高い声で返事を返す。

泰三を気絶させた性で、大将に大目玉を食らった。

その罰として、行くつもりがなかった学校に行かないといけないう羽目になってしまった。

あれは小突いた泰三が悪いのに。

「何で不機嫌そうな顔をしているんだ？雛菊」

出席確認をした後は、10分程度の休み時間が与えられる。

私に話しかけてきたのは桜井って苗字の男子生徒だ。

下の名前は幹人とか言うみたいだが、私的には『桜井』という発音が好ましい。

髪は黒く短髪で、瞳は綺麗な黒色。

顔はどつちかというところ可愛い系だが、微かに男らしさを滲ませている。

「言いたい事はそれだけ？桜井」

用がなければ話しかけないでほしいんだけど。素っ気無い口振りで、会話の流れを断とうとする雛菊。

学校は私服登校が規律、法律の如く徹底されている。

私にはそこまで『私服』に徹底する意味がわからないが、制服なんて財政を浪費するモノがないから、こちらには利益があって助かっている。

「まあ、そう言うなつて。雛菊は明日暇か？」

「突然なに？　暇だけど」

桜井の質問に対して、一瞬『暇じゃない』と言おうかと悩んだが、嘘はあまり好きじゃないから言うのをやめる事に決めた。

「なら、美術館に行かないか？都合良くチケットが2枚もらったんだけど」

話を経緯を述べる桜井の淡々とした口振りに、すこし苛立ちを覚える。

所詮は好都合主義の世間だ。金払って行くよりは無料で行けるほうが得。

なら、答えは決まっている。

「わかった。明日の何時から行く？私の都合では15時辺りがいいんだけど」

「なら15時でいい」

会話はこれで終わり。一限目の始まりのチャイムが教室内、学校内に設置されているスピーカーから流れる。

古き良き時代を感じさせるところか懐かしいチャイムの音。

趣向をよく凝らしていると関心さえ感じてしまう程だ。

退屈の授業に退屈の学校での日常。

最近思うのだが、こんな生ぬるい場所に何の意味があるのだろうか？将来役に立ちそうにない勉強は無駄に限りなく近く、生徒や先生

達はみんな平和ボケしている。

授業中はずっと窓の外を眺める。

眺めているだけで授業は終わるが、たまに注意をされるので時折黒板の方に視線を向けて、また窓の外に視線を逸らす。

>>4<<

4月28日の午前11時。

「これ、欠陥品だ」

雛菊は自室でそんな愚痴を漏らしている。

手に持っているのは折りたたみ式の刀。

この前、通販で買った奴だ。

値段は高かったが、携帯するには便利だと思って買ったのだが、買ったのは失敗だった。

折りたたむ事を意識している構造のため、刀の硬度も切れ味も低くこれでは長くは持ちそうにない。

すぐに折れるのが関の山だ。

やっぱり、刀は『紅雪』が一番　なぜなら、私の一番の宝物。

部屋には他にも数本の刀が飾られている。

飾られている刀の内の半数は柄のない『古刀』と呼ばれる種類の抜き身の刀だ。

部屋の臭いはすこし鉄の臭いがして、雛菊以外の人にはすこしきつい臭いだ。

廊下側の襖に黒い影が映り、開かれる。

襖を開けたのは泰三だった。

「相変わらず鉄臭い部屋だな。お、それが折りたたみ式の刀か？」

入ってきた時、泰三は鼻を押さえようとするが、途中でやめて刀を指摘してくる。

「これは欠陥品だよ。すこいだけしか持ちそうもないよ」

雛菊はすこし不機嫌そうに言うと、刀を泰三に投げて渡す。

空中で刀を片手で掴むと、刀を軽く人差し指でなぞる。

「刀は所詮は消耗品だろ？寿命なんか気にしなくてもいいんじゃないか？」

「消耗品にすらならないよ。それに、『紅雪』は消耗品じゃない」
雛菊の言う事も正しい。

この折りたたみ式の刀は消耗品以下の代物だ。

切れ味も悪いし、無駄に重たい。

これでは欠陥品呼ばわりされても弁解の余地がない。

「あのさ、携帯用のスタンガン貸してくれない？」

突然の雛菊の頼み、泰三はすこし戸惑いを色を表情に浮かべる。

「なんでスタンガンなんかを？刀だけで十分だろ？」

「刀は昼間持ち歩けないし、持って行ける得物はワイヤーかサバイバルナイフくらいしかないでしょ？」

だから貸して。少々一方的な口振りだが、確かに刀は持ち歩けない。

泰三はすこし考えて、結果的に貸す事にした。

掴む取っ手は絶縁体のテープでグルグル巻きにしている一般的な護身用のスタンガン。

効果的には標準的な成人男性が2時間以上麻痺して動けない程度だ。

「泰三のスタンガンの具合はいつも良い感じなんだよね」

雛菊は褒めているのか貶しているのか中途半端な口振りをしながら、スタンガンを手提げの白いポーチに入れる。

ポーチの中には財布、携帯、ワイヤー、カバー付きのサバイバルナイフが各一つずつ入れてある。

「雛菊、持ち物検査だけはされるなよ？警察に捕まるような事があつたらこつちが面倒な事になつちまう」

「わかってるよ。迷惑はかけないようになるべく心がけるようにはするから」

確証はないけど。雛菊は自信がないと遠まわしに言う。

泰三は微妙な不安感を覚えると、自然とため息が出てくる。

「まあ、出来るだけ楽しんで来い。友達と遊ぶのは学生の仕事の内だしな」

「出来るだけ『蟲』には会いたくないな。昼間は殺す機会がないから」

人に見られて警察に通報されたらたまったもんじゃない。

蟲は基本的には普通の人間の姿で識別がすこし困難。

普段は寄生している人間の表面的な理性の壁で『蟲』としての本性を抑え込んでいる。

理性の壁がなくなるのは、人を殺す時と移植と呼ばれる仲間を増やす時の二つだけだ。

「なあ、蟲を殺す際の現場を見られた場合の対処法はなんだ？」

「現場を見られたら口止めをするか、もしくは殺せだっけ？何で今そんな事を訊く？」

「ただの確認さ」

そうただの確認、平和ボケから目を覚ます言葉。

泰三のその言葉には『呪詛』のようなモノを感じる。

現実に取り戻す言葉としては想像以上に効果があるから、『呪詛』と感ぜてしまうのだろう。

>>5<<

午後の14時57分前。

美術館は駅から徒歩で5分程度の距離にあり、待ち合わせとして一番適しているのが駅前の時計台だ。

時計台の前には白い手提げのポーチを片手に持った雛菊が立っている。

すこし早く来すぎたため、待たされる。

待たされる事に対して、雛菊は勝手に不機嫌になり、時折時計台の時計を見上げる。

59分を回ろうとした時、駅のホームから桜井が歩いてくる。待った？さり気ない桜井の言葉に、すこし強くむかついた。

「……とりあえず、美術館に行こう」

雛菊はそう投げやりな口振りを見ると、美術館の方に向かって歩き出す。

立ち話するだけ時間の無駄だ。

怒っているのか？桜井は雛菊のすこし後ろを歩きながらそう思う。
雛菊の考えは謎だ、特徴ははっきりしないからだ。

学校の生徒達は話していれば大体の考えは読めるが、雛菊の考えだけは全くと言っていいほど読めない。

「振り返るのが面倒だから歩くなら横を歩いてくれない？」
言葉の感じから、すこし不機嫌なのがわかる。

雛菊は振り返らずにそう言つと、桜井は言つとおりにな走するよ
うに並んで歩く。

雛菊の横顔は不機嫌そうで、瞳をすこしだけ細めている。

「なあ、俺なにか雛菊を不機嫌にさせる事でも言つたか？」

「別に、それに私は怒ってない」

それは絶対に嘘だと断言出来た。

雛菊は周りをキョロキョロと忙しそうに見回している。

「どうした？」

桜井はさり気なく雛菊に訊ねる。

「気のせいだったみたい……でも確かに」

雛菊は意味不明な言葉を口走りながら自分の世界に入り込んでい
く。

眉間にすこしシワを寄せて、悩んでいるようだが、美術館に向か
う歩きは止めない。

置いてけぼりにされてる……

「雛菊、何が『確かに』何だ？」

桜井は悩んでいる雛菊に訊ねる。

雛菊は桜井の言葉で妄想から現実に戻されるとすこし慌てて
「なんでもない！さ、さっさと美術館に行くよ！」

不自然な口振りだな。

桜井は疑問視するように雛菊を軽く凝視する。

不味い、雛菊はすこし立場が悪い事を再認識すると、黙り込む。
今喋れば何かを訊かれる事必死だと思って黙る。

それ以外に黙る理由が見つからない。

いや、探してすらない。

「でも、意外だよな。雛菊が誰かに誘われて『行く』なんて答えたの初めてじゃないか？」

話しかけられた時、一瞬ドキッ！として体がすこし跳ね上がった。
だが、話の下りを聞いているとホッとした。

「まあ、桜井は別に嫌いじゃないから」

本当は『それに美術館に無料で入れるんだ』と言葉を付け加えたかったが、それは途中でやめる事にした。

「それって俺の事好きなのか？」

呆然としたような顔で桜井は訊ねてくる。

この能天気馬鹿。

「それはないから安心していいよ」

雛菊のその言葉に、桜井は精神的なダメージを受ける。

結構シヨックだった。

そのシヨックを隠すため、桜井は苦笑する。

それから美術館に到着するまで、会話は途切れたままだった。

美術館の入り口の窓口の方では桜井がチケットを見せて確認させている。

窓口でのやり取りはすぐに終わった。

足早に入り口の壁際に立っている雛菊の元に戻る桜井。

「意外と早かったのね」

とにかく中に入ろう、雛菊はそう言うたさっさと美術館の中に歩みを進めていく。

美術館の中には至るところに訳の解らない絵画などが提示されて

いる。

ゲルニカのレプリカ、ヒマワリのレプリカ、有名なモナリザその他多数。

色んな絵画が提示されていて、違う世界みたいな錯覚を起こしてしまいそうだ。

奥に歩みを進めていくと、日本刀などが数十本提示されている。

これには、雛菊は喜んで刀を凝視していく。

良い刀……歴史ある日本刀の数々見惚れてしまい、思わず考えていた事を言葉に出してしまう。

「雛菊って日本刀が好きなのか？」

「好き、大好き。でも、ここにあるのはみんな『紅雪』に一步美しさに欠ける」

「くれないのゆき？」

紅雪、桜井のパツとしない発音に対して、すこし強い口振りで雛菊は桜井の発音を正す。

「紅雪は私の宝物の日本刀。とっても綺麗な刀なんだよ」

綺麗と言われても、日本刀にそれほど大差あるのか？

そんな疑問を内心で呟く桜井。

雛菊はさらに語る。

とても楽しそうな様子で、顔は微笑ましい程の笑顔だ。

雛菊の顔立ちはとても大人びているのに、笑顔はまるで子供みたいで、すこしギャップのような違和感を覚えてしまう。

「雛菊は毎日、日本刀を持っているのか？」

「持つてるけど、何かおかしい？」

おかしいと訊かれたら、おかしいとしか言い返せない。

でも、外に持ち出したら銃刀法違反で捕まるんだよね。

さり気なく物騒な事を口走る雛菊。

「よし、じゃあ次観に行こうか」

次の場所に行こうとした時、ポーチの中の携帯が鳴り出す。

雛菊はポーチを隠すようにしながら携帯を取り出して、片手だけ

で折りたたみ式の携帯を開く。

携帯の画面には左上にアンテナの一本線を立てている。電波が悪いという事だろう。

掛けてきたのは泰三だった。出るべきか出ないべきがすこし迷ったが、用件くらいは聞こうと思って電話に出る。

「何か用？」

<今、田川建設場に居るんだ。場所はわかるよな？>

田川建設場は美術館から約8分程度の距離にある場所だ。何年か前に財政難で倒産して、今では廃墟になっている。

「知ってるけど、だから何？」

<仕事だよ仕事。話は現場でやるからすぐに来い>

泰三はそう言っと、電話を一方的に切る。

やっぱり面倒な事だった。

ポーチの中に携帯を入れると雛菊は桜井の方を振り返るように見て、

「用事が出来たから、私はもう帰るから」

近々、何かお詫びさせてもらうから。雛菊は半ば一方的に言う走り去っていく。

お詫びか、桜井は一人置いてけぼりにされた感じで、何かやるせない気分だ。

でも、もう行ってしまったのだから仕方がない。

一人で美術館を回ろう。

>>6<<

「これはまた……随分と悪趣味な殺し方」

田川建設場の使わなくなった廃材の影に隠れるように人間の死体があった。

奇妙な死体だった。目が抜き取られているからだと思った。

死体の目は綺麗に挟られていて、普段は目で隠れている場所がはつきりと良く観察出来る。

だが、一番奇妙だと思ったのは、これだけやられているのに死体には抵抗した跡が見えないのだ。

「移植でもする気だったのかな？でも、それなら何で途中でやめたりするんだ？」

疑問だった。雛菊は疑問を不意に言葉にしてしまう。

「まあ、蟲の仕業には間違いないな。しかし、痕跡が残ってないな。これじゃあ探せないし、餌で釣るしかない。

「それは却下」

泰三の言った『餌で釣る』という提案を雛菊は短く拒否する。

「なら、どんな方法で探す？」

「この死体の感じなら、死後2時間程度でしょ？目を抉ったのが蟲なら、多分抉った目は食べたと思う。人の血の臭いつて中々消えないじゃない？なら、方法は一つ、街を探し回る。これしかない」

一番大変で面倒な方法を提案する雛菊。

泰三はすこし思案する。この方法は確実じゃないし、それなりに人手が要るから、目立ってしまう可能性が出てくる。

「その方法でいいだろう。とりあえず、これ持っていけ」

縦長の細い革製のバッグを雛菊に向かって放る。

バックの中には日本刀の『紅雪』が入っている。このバッグ入れであるなら、刀を持ち歩ける。

「人手は泰三に任せるから、私は先に探してくるから」

「任せとけ。とりあえず、一言だけ言っとく」

夕飯までには帰って来い。多分、言葉の意味は『死ぬなよ』だと思われる。

泰三のその言葉には妙に安心感を持たせる力がある。すこし、雛菊は笑ってしまう。

「後で夕飯と一緒に食べてあげるよ」

そう言うと、雛菊の顔から笑みが消え、真顔になる。そして、バッグを片手にどこかに走り去っていく。

ここで、泰三はポケットから煙草を箱を取り出して、一本だけ口

に啜えて、ライターで火を点ける。
一服してから人手を集めよう。
そう思いながら、煙草を吸う。

雛菊は微かに大気に漂う血の臭いを追いながら、夕暮れの街を走っている。

息切れ、すこしずつ動悸が早まっていくのを感じながら走る。
夕暮れの街は人が多くなっている。これでは見つけても、すぐには殺せない。

店のネオンなどは幾つか灯り出し、屋台などの店の性で、臭いが混じっていく。

血の臭いが完全に消える。屋台のラーメンやら焼き鳥やらの臭いだけが残る。

舌打ちを一回して、走る速度を歩く速度に変更する。

これ以上走るのは体力の無駄だと思ったからだ。

ここで、雛菊はある古典的な方法を思いついた。

バックを真っ直ぐ地面に立てて、倒れた方向に進む。

やるだけ無駄だとは思うが、打つ手がないため、神頼みするしかない。

立てた、倒れた、路地裏だ。

バッグが倒れた方向はすぐ横の路地裏の方向だった。

確かに、路地裏ならこつちとしては好都合だが、それで居たらかなり好都合過ぎるのではないかと思ってしまう。

でも、これは神様のお導き。

地面に倒れたバッグを拾い上げて、路地裏に向かって進んでいく。すると、路地裏の大気には微かに血の臭いが残留している。

好都合な事だらけの世間ね。意外過ぎて、呆れてしまう。

まあ、運がよかった。

雛菊は再び走り出す。路地裏は夕暮れでも暗い。

段々、血の臭いが濃くなっていく。そして、路地裏を抜けて人気

のない河川敷に出る。

周囲は建物しかない河川敷。ここなら見つかる可能性は薄い。血の臭いは河川敷に流れる川の臭いで消されているが、もう臭いはどうでも良い。

グレーのコート姿の男性が立っている。雰囲気でわかる。

この雰囲気は蟲だ。

だが、男はまだこちらに気づいてない。普通ならチャンスなんだろうが、

「良い夕暮れだと思わない？」

言葉には意味はない、ただこちらの存在を確認させるためだけの言葉。

一歩一歩ずつゆっくりと着実に男に向かって歩みを進めていく。バッグのチャックは半分程度開けて、片手をバッグの中に滑り込ませて『紅雪』の柄を掴む。

男は気づいているはずだが、こちらに振り返らずに、背を向けているだけだ。

「……お前の血は美味いか？」

男は当然言葉を返す。だが、こちらには振り向かない。

「どうだろう？ 血の味なんて比べた事がないな」

そうか 男はコートの中から折りたたみ式の槍、いや、戟を取り出して、伸ばす。

目測で大体3メートル弱の長さの戟。切れ味は良さそうだ。

「狩人の血は美味いモノだと聞いている」

ここで、男は初めて振り返る。

重苦しい殺意だけは感じ取れる。

雛菊はすこし笑いを零す。おかしくないが、勝手に笑ってしまう。「そうなんだ。じゃあ私も一つだけ…… 蟲の死顔はとても良いんだよ」

仕事の開始、雛菊はバッグから刀を取り出して、バッグと鞘をその場に放り捨てる。

本気の殺し合い。刀は下段の構えを取り、軽い深呼吸をする。殺気は出さない。安っぽいと思うからだ。

男は戟を両手に持ち直して、雛菊の胴体目掛けて戟を放つ。直線的な軌跡を描くように、戟は雛菊の体を貫こうとする。

刀で横に弾かれる戟。赤い火花が一瞬だけ飛び散る。

完全に伸びきった戟の棒を、刀で下から振り上げるように断ち切る。

戟の刃は地面に落ちて、男はすこし驚愕の色を顔に浮かべる。

3秒の間に、得物が壊された事に、雛菊の体を戟で貫いたイメージを壊された事に、驚いた。

男はすこし呆気にとられる。そして、隙が生まれる。

弱いな、雛菊は男の正面に向かって駆け出し、刀の刃を大振りに振る。

反射的に男は後退した。だが、すこし遅かった。

大振りの刀の軌跡は男の首半分を完全に捉えていた。

食道から気道、骨を断ち切られた男の首はパツカリと開いて、赤い鮮血が噴出す。

返り血を顔半分にはベツトリと濡らした雛菊の血で濡れた瞳は黒から赤に変わっている。

沁みる。けど、ここは我慢。雛菊は間髪入れずに男の鳩尾に一発だけ蹴りを入れて、男を地面に倒す。

男の思考能力は低下している。血を致死量近くまで流した性だった。

苦しい、熱い、目の前が霞んでくる、気分が悪い。

「、、、、、、、、」

言葉にならないうめき声を、男は漏らす。

息絶える寸前の男に対して、雛菊は首の傷口に刀の刃の真ん中部分を押当て、刀の刃を上から足で踏んで、完全に首を切断する。全体重を乗せた刃は首をすんなりと切断出来た。だけど、靴が血で汚れた。

「仕事はこれで終わり。これで、断頭率は80パーセント達成ね」
血で濡れた刀を何度か地面に向かって強く振って血を飛ばす。
濡れたまま鞘に収めたら、鞘が穢れてしまうからだ。

断頭率とは、蟲を絶命させる際に、首を切り落とした平均だ。

雛菊はその断頭率が異常な程多いため、ついた仇名が『処刑台』
別名ギロチンだ。

顔に浴びた返り血は河川敷の川の水で洗い流す。

返り血を出来るだけ洗い流した後、泰三に電話をする。

処理班を呼ぶために電話をした。

話は大体10秒程度で終わる。場所さえ言えばそれだけで来るからだ。

夕焼けは海の地平線に消えかけている。刀の刃は紅の夕日の光を浴びて、反射している。

その反射する様は白銀の雪が浴びる夕日の光みたいで、それが語源となって『紅雪』と名前が付いた。

鞘を拾って刀を収める。鞘に収めたら、バッグの中に収納して、片手に持ち直す。

すこし長く一回だけ首の切断された蟲の死体に視線を向ける。

呆気ない光景だ。死体の存在感は薄れ始めて、もう何も感じない。
血生臭い空気だけが残っているだけの、ただ汚物だ。

その言葉で片付けて、雛菊はその場から背を向けて立ち去る。

立ち去る雛菊の後姿は夕日を微かに浴びていて、どこかハードボイルドを思わせる独特の雰囲気醸し出している。

渋い感じがした。

「今度はちゃんと生まれ変われよ？また蟲になんか生まれたら殺さないといけない羽目になるから」

誰に言ったのではなく、自分にすら言ってる訳じゃない。

ただの独り言だった。独り言で済ませる予定だったからだ。

魂なんて不純物があるとしたら、多分、この独り言はその不純物に対して言っている。

路地裏の闇に完全に消える頃には、夕日は完全に地平線に消えていた。

>>7<<

「水族館だつて？」

下校時間の学校の廊下で雛菊の言葉に驚いて、桜井は言う。

「この前のお詫びとして、今回は私が奢る事にしたから」

この前のお詫びとは、美術館での事だ。

途中で帰ったため、雛菊なりに『悪い事をした』と思つてのお詫びだ。

「いいけど……何か雛菊らしくなくて不気味だな」

あの雛菊は水族館に誘うなんて、意外だった。

意外過ぎて、不気味に感じてしまうのは俺の悪い癖なのかもしれない。

桜井がそう言うのと、雛菊はすこし目を細めて、桜井を睨む。

「じゃあ、来なくて良いよ」

雛菊は怒つてそんな事を言う。

「別に行かないって言つてないだろ？それにしても、何で水族館？」

雛菊はすこし苛立つ。桜井の能天気な発言に対して、怒りすら感じてしまう程だ。

「……イルカショーが観たいから」

すこし言葉を濁す雛菊。桜井はすこし呆氣に取られると、思わず笑つてしまう。

水族館への誘いも意外だったが、イルカショーが見たいという言葉も意外だった。

それなりに可愛らしいところはあつたんだ。

そう桜井が言うと同時に足の脛を強く蹴られる。

あー我慢はやっぱり良くない。雛菊はそう口走りながら、何度か連続で桜井に蹴りを入れる。

脛は痛い。何度か蹴られると、すこしふらついてしまう。

はたから見れば、仲が良いように見えなくてもないが、当人的には逆のように感じてしまう。

「蹴るなって！ただ女の子らしいって言ったただけだろ？」

「五月蠅い！桜井の言い方は何か苛苛する」

それはさすがに言いすぎじゃないか？口喧嘩はしているが、桜井は雛菊に一方的に蹴られ続けている。

空は夕暮れの紅に染まり、ツバメか鳩が何羽か飛んでいる。

雲は地平線に流れ、消えて、夕日はもう地平線に沈みかけている。

「もう下校時間過ぎてるし、帰ろう」

数十発桜井を蹴って気分が晴れた雛菊はそう言って踵を返して歩き出す。

稽古の時間だって事を忘れてた。

蹴られた桜井はすこし足を引きずりながら雛菊の横を歩く。

「なあ、すこし肩貸してくれない？蹴られすぎて足が言う事利かない」

「嫌だ。自分で歩けば良いし、歩けなくなったら見捨てていくから安心して」

……鬼……そう思うとため息が勝手に出てくる。

見捨てていくから安心して、見捨てられる事に対してどんな安心を持てばいいんだ？

その疑問は桜井は口に出さない、思うだけだ。

それにしても

「夕暮れの空は綺麗だ」

スクリーン2 題目「錬金術師」

5月1日の午前0時

どこかの港付近の倉庫群。夜空には宝石が大量に散らばったような星空だ。

空は美しい。だが、地上は凄惨なモノだ。

倉庫群の中の一箇所、重苦しい空気が支配している。

差し込む月の光に照らされた、血まみれの女性の死体。

死体の死因は首の斬首、切断された性だろう。倉庫の中の空気は血の悪臭が漂い、今にも嘔吐しそうな程だ。

その血まみれの死体を見下ろすように見つめているのは、身長150センチ程度の長い綺麗な黒髪をした少女だった。

少女の顔つきは成人女性並みに大人びた美人だ。黒で統一された服装には、赤い血液がペイントアートみたいに染まっている。

右手に握んでいる長さ160センチ程の日本刀の刃先は、赤い血液で白銀の刀身を真っ赤に染めて、月の光を浴びて妖しく光を放つ。

少女、刹那雛菊は死体を見下ろす眼差しを細めて、軽く舌打ちをする。

「最悪だ。ここまで返り血を浴びたら、下手にここから出られない」
本当に最悪だ。少女は軽く怒り、誰に言ってる訳でもない愚痴を漏らす。

気分はとても不機嫌。雛菊は髪を片手で掻きながら、倉庫内のコンテナの上に腰を下ろして、持っていた携帯でどこかにメールを送信する。

送信完了。そんな文字が画面に表示されると、携帯を片手で閉じて、上着黒い薄手のジャケットのポケットの中に入れる。

無意識に、倉庫の天井窓から覗く夜空を見上げる。

宝石が散らばったような星空は、とても美しいモノだと認識した。

いや、認識させられた。それ程までに、星空は美しいのだ。星空を眺め始めて16分が経過した時、倉庫の外に処理班、狩人とは違う気配を感じる。

蟲でもない。だが、この気配は知っている。

この意識をすこしずつ侵食していく気配は、『錬金術師』と呼ばれる奴のモノだ。

それも、一番遭遇したくない相手　魔術師の仇名を持った錬金術師のモノ。

コンテナからゆっくりと腰を上げて、右手に掴んでいる日本刀の握りを強く握り直す。

私一人でも勝てる？いや、勝てる確立は限りなく薄い。

皆無だ。だけど、逃げる事なら十分可能だ。

扉が開いたら、無意識的に反応しろ。目で認識しないで反射的に反応しろ。

そうしないと、一瞬で殺される。

雛菊は自分自身にそう言い聞かせる。言い聞かせている言葉はもはや言葉ではなく、呪文、いや、呪詛になっていた。

気配が扉に触れる。雛菊は重心を限りなく低くして、その体勢はまるで短距離スプリントのスタート直前の選手のようなうだ。

スタンディングポジションだったかな？名前はあまり記憶していないが、この体勢が一番反応しやすい。

扉がゆっくりと開かれて、50歳前半の男性が視界に入る。

まだ、動くな。動きそうな自分の体に向かって、内心で言葉を吐き捨てた。

男性の顔つきは優しくそんな顔で、理想の老紳士みたいだ。

印象だけでは恐怖の念は覚えたりはしないが、周りに纏っている重苦しい雰囲気は雛菊の警戒心のレベルを上昇させる。

「おや、美しい少女だね。君は狩人かな？」

斉藤は雛菊を見るや、とても優しい口振りで話しかけてくる。惑わされるな。こいつは代用品を求めて来ただけだ。

警戒心を低下させそんな斉藤の言葉に対して、内心で男性の言葉を拒否する。

「あんた、錬金術師？」

「そう、私は錬金術師の斉藤です。力の性質は『ポルター』で、仇名は魔術師。ここは退いてもらえませんか？私はただ、その死体から代用品を摂取したいだけなんですから」

斉藤は雛菊の問いかけに丁寧な口調で答える。その直後、斉藤は雛菊の視界から消失する。

戸惑った。そして、一瞬だけだが、一種の錯乱状態に陥った。

「とりあえず、首と腕の骨を数本だけ戴きますね。それだけしか持ち帰る事が出来ませんから」

斉藤の声が、後ろに転がっている死体の方から聞こえた。背筋が凍りついた。そして、恐怖する。

振り返るか、振り返らないか、そんな迷いが、脳裏を激しく疾走する。

答えは決まっている。けれど 振り返る事が怖い。

「怖がる必要はありませんよ？ただ理解の領域を超えてしまったただけです。人は理解出来ないモノを恐怖と感じるんですよ」

斉藤はいつ近づいたのか、私の髪を軽く撫でて、耳元でとても優しい口調で囁く。

囁かれた途端に、全身の力が抜けた。私の負けだ。

「これで、君は私を恐怖しないでしよう。一度理解出来る領域を超えれば、理解出来る領域は大きくなりますからね。次に逢う時には、私を楽しませてくれるところまで戦ってください」

それでは、失礼。斉藤は助言染みた言葉を言うと、霧のように霞んで、消えてしまった。

助かった。殺されなかった。まずは安心。

負けた。完全に私の敗北だった。次に敗北感。

色んな感情が螺旋のように渦巻いて、私の意識を支配していく。だが、同時に対抗心が強くなった。

次は、殺してやる。次は絶対に負けない。

自分に対して、一回だけ舌打ち。

そして、倉庫の中から外に出て、闇の世界に溶け込むように消えていく……

スクリーン3 題目「交錯螺旋」

静謐な朝……都心近くに位置する寺なのに、ほぼ無音の境地だ。

無音の境地だった空間を断ち切るような、壊される金属の音。その音は騒音というよりも、轟音に近かった。

寺の中庭では、何か鋭利なモノで切断された工事現場でよく使われている鉄鋼が真ん中から二つに別けられている。

鉄鋼はトロツコのような機械で縦に固定されて、5本以上同じように固定されている。

その鉄鋼の内、一つの前には身長150センチ程度の長い黒髪のラフな白い半そで姿の少女が立っている。

少女の右手には、長さ約2メートル半の大振り的大刀の取っ手を握り締めている。

取っ手は包帯で雁字搦めみたいな感じで何十回も巻きつけられていて、しっかりと握れる。

「やっぱり、これ重たい」

少女 雛菊は荒い息遣いで、誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。両肩は上下に揺らして、額から両腕には汗が滲み出ている。

大刀の重さは約70キロで、華奢な体の雛菊にはかなり重たい。

取っ手を掴んでいる右手がジンジンして疼き、さつきから回転を加えて大刀を振り回していたため、細い両足 特に右足がガクガクと震える。

(一、二、三、四、五、六、七……次の八振り目で限界)

八振り……それはこの大刀を雛菊が全力で振れる回数。少々、振れる回数は少ないが、まだ発展途上の少女の体にとっては、それくらい振れば上等だ。

大刀の取っ手を両手で握り締めて、右足を地面に引きずるように、一歩前に差し出す。

右足を一步前に差し出したのは、踏み込むための下準備。体重の重心を低くして、踏み込んだ。

上半身を半時計周りに捻って、大刀に遠心力を加えて振る。大刀の刃が鉄鋼に触れた瞬間、一瞬だけ赤い閃光のような火花が飛び散って、鉄鋼の中に刃が侵入する。

ここで、さらに右足をズリュツ！と地面を擦るように捻って、今度は上半身だけでなく全身を回転させる。

さらに遠心力を加えられた刃は鉄鋼の3分の2まで侵入し、最後の締めくくりとして、体重の重心を刃に移動する。

加重まで加えられた刃は、力が最大値に達して、分厚い重みのある轟音と共に、鉄鋼を切断する。

切断し切った大刀の刃は勢いが衰えず、雛菊は強引に、勢いのある刃を地面に振って、止める。

地面は大刀に割られて、大刀は入射角70度辺りで地面に突き刺さり、停止している。

ボタン！大刀の取っ手から両手を放すと、そのまま地面に尻餅をついて、座る。

両腕が痙攣したみたいに痺れて、上手く動かせないし、上がんない。

右足は最後にグキツ！と捻りすぎたみたいで、痛い。

荒い吐息を吐きながら、蒼天の白い靄のような薄い雲の掛かった空を見上げる。

（はあはあ、やっぱり、生気のない刀、振っても何も感じ、られない）

軽い不満を内心で呟く。職人の丹精込めて作り上げた業物には、こうありたい、こうされたいなどといった想いに似た感覚を覚えさせられる力のようなモノがある。

雛菊はそう言った力のある得物　刀などを一つに限定して、『生気』と呼んでいる。

例として挙げるなら、紅雪がそうである。

雛菊は蒼天を見上げていた視線を傍で突き刺さっている大刀に逸らす。

（コレには、生気が全く感じられなかった。まあ、鍛錬にはなったから良いけど）

結果的には体を鍛えるという目的は達成出来た。その結果に不満があるとしたら、この生気のない大刀だろう。

すこしずつ、呼吸が整っていき、両肩の揺れも腕の痺れも直っていく。

右足のほうも、痛みが和らいできた。だけど、歩いたら響くような痛みが感じるだろう。

勝手に予想する思考。最近、そんな思考がたまに嫌になる。

中庭に面している廊下を歩く足音が聞こえた。雛菊は何となく、廊下のほうに視線を向ける。

黒い綺麗な瞳、汗で濡れた白いラフな半そでは、肌に密着していて、薄っすらと肌色に変色している。

「よう、相変わらず朝早いな。それにしても　コレは一体誰が片付けるんだ？」

泰三が軽い挨拶の言葉を言うと、周りに散らばっている切断された鉄鋼を指摘してくる。

寝癖なのか、ラフな感じに立っている黒い短髪を片手で搔く。

「泰三が片付ける。私は学校」

雛菊は当たり前のような口振りで、短く答える。

泰三はため息を軽く漏らしながら

「お前、最近学校って理由付けて逃げてないか？」

「別に、だって本当だし」

素っ気無い口振りで答える雛菊とすこしテンションの下がった泰三が空を見上げる。

5月2日の12時40分頃。

高等学校の屋上で、一人購買部で買った塩おにぎりを口に頬張る雛菊。

私服重視の学校なので、雛菊は普段通りの私服姿だ。

白い半そでのシャツに黒い通気性の良い長ズボン姿。

雛菊に私服の選び方は夏場は白い半そでのシャツで、冬は長袖の灰色のシャツ。

そして、冬の時に羽織る上着は黒いジャケット。蟲を殺す際に着る上着だ。

最近、暑くなってきたが、まだそれなりに風は北風よりで、少し風が強い。

塩おにぎりの半分を食べきったところで、屋上と下の階を繋ぐ階段側に通じているドアを開く。桜井だった。

「食べる場所変えたんだな」

手には購買部で買ったカレーパンや焼きそばパンが入っている白いビニールを袋を持っていて、当たり前のように雛菊の横に座る。

「何か用？」

雛菊はそう言うと、横に座る桜井の顔を、猫みたいに細めた瞳で見る。

「用はない」

桜井はキツパリと言い切って、カレーパンの袋を開ける。

（ならどっか行け）

内心ではそう呟くが、言葉にするのは何だか気が引けた。

「あ、そう」

だから、そんな素っ気無い言葉を変わりに言う。

すこしばかりの沈黙。食べている時に話すのは行儀が悪いから、話さないだけだ。

雛菊と桜井はほとんど二人同時に塩おにぎりとかレーパンを食べ終わる。

そして、まずは桜井が口を開く。

「そうだ、忘れてた。同じクラスの付箋が、今週辺り家でホームパーティー開くんだとさ」

付箋というのは同じクラスの男子生徒だ。付箋は金持ちの家の息子で、学校の近くの周りの平凡な家とは違うすこしばかり大きな屋敷に住んでいる。

屋敷はこの屋上からも見える。深紅のような赤い屋根なので、目立つ。

「そのホームパーティーはクラスの担任や生徒の親睦会も兼ねているみたいだから、雛菊も参加しろよ」

桜井はそう言つと、焼きそばパンの入ったビニール袋の口を強く縛る。

その桜井の行動にすこしばかり疑問を思ったが、まずは付箋のほうが先だ。

「……わかった。それで、今週の何日にする予定？ 私にも都合の悪い日がある」

「確か、5日だったな。その日はこの高校の建設記念日で休みだから、記念日にちなんでもやるんだとさ」

付箋、お調子者だから。桜井がそう言つと、雛菊は唇に手を当てて、すこし考える。

最近、蟲は頻繁に出没したおかげで、今月でもう10匹も殺している。蟲もそれなりに馬鹿じゃないから、今週は出ないだろう。

根拠のない予想を考えると、今度は桜井を見て

「その日は何もなかったと思うから、多分行ける」

「強制参加ではないけど、まあ、必ず来いよ。約束したぞ」

（そんな約束した覚えはない）

そう言つてやりたかったが、面倒になる可能性もあるため、言葉にするのを我慢した。

そして、雛菊の次の話題に話を持っていく。

「その焼きそばパンは食べないの？ もしかして、持ち帰り？」

桜井の持つている口を強く縛ったビニール袋を指差しながら、何となく質問する。

「これか？これは俺が食う訳じゃないよ」

「ふーん、もしかして、パシリ？」

雛菊の質問に対して、桜井はすこし表情を引き攣る。そして、違う、と短く反論。

疑わしい眼差しで桜井を見る雛菊は、視線を桜井から空に向けて背伸びする。

（やっぱり、猫科だよな……）

桜井は雛菊の背伸びしてるところを見ながら、内心でそう呟く。2時間前の休み時間に、クラスの男子と話していると、『クラスの奴を動物に例えるなら』そんな話題になり、盛り上がっていた。男子達みんなの意見は多少食い違いがあったが、一人だけほとんどの意見が一致した人物が居た。それが雛菊だ。

雛菊が猫科呼ばわりされた理由は、とっつき難い雰囲気を辺りに漂わせている事。

「さっきから何ジロジロと人の顔を見ている？」

「雛菊、前世占いした事ある？」

はい？桜井の半ば意味不明な言葉に、呆れるような眼差しを桜井に向けなおして、

「どこから出た質問なのかは知らないけど、占いなんてやってもらった事ない」

そんな確証のないモノ。やっても無意味な事。

テレビなんか見ていたらわかるが、占い以前に、占い師はインチキくさい。

未来なんて不確かなモノがわかる人間なんて、この世に居る訳がない。

雛菊はキツパリと答えると、桜井は予想していた通りだったのか、納得した。

>>2<<

昼間なのに、異様に薄暗い路地裏。奥のには人影のようなモノが見える。

人影は若い男性と女性の二人のモノだった。

昼間から仲よろしく、お互いの唇と唇を触れさせて、世間ではデーパーキスなどと呼ばれている接吻をしている。

一分間キスをしていると、男性の方は突然、地面に崩れ落ちる。

男性の体は激しく痙攣していて、口から唾液が地面に流れ落ちて、広がる。

「無様な仲間達は殺されたけど、私は殺されない。だって、頭の出来が違うんですもの」

痙攣する男性の頬を両手で掴み、優しく抱き起こす女性は、とても線の細い声で言う。

そして、理性の壁と呼ばれる蟲が寄生している人間の表面的な理性をすこしばかり外す。

再び、女性は男性とデーパーキス 接吻する。

その瞬間、男性は心臓を停止して、人間で言うなら死亡した。

だが、これは蟲が仲間を増やすために行う移植と呼ばれる方法で、すぐに生き返る。

女性は再び理性の壁で自分の存在を抑え込む これで、狩人達

に悟られる心配はない。

「そろそろ、起きなさい」

そう言葉を吐き捨てるように言うと、ハイヒールの爪先で男性の頭を軽く小突く。

男性は白目を向いていた眼球を元の黒目に戻す。女性は妖しい笑みを口元に浮かべる。

そして、女性は男性に手を差し伸べて

「初めまして、東堂さん。蟲に転生おめでとう」

言葉は挨拶だが、言葉の発音の質には少々殺意のようなどす黒い

何かを秘めている。

その言葉で、男性の中に寄生した蟲は完全に男性の体を支配する。男性は差し伸べられている女性の手を掴んで起き上がる。

「……何だか、清しい気分だよ。草堂」

女性の名前は草堂、男性の名前は東堂。

二人の醸し出す雰囲気は、何かの協定のようだった。

路地裏を闇を侵食、支配でもするかのような内面上の殺意だけが、その場の空気を重くした。

>>3<<

「ここが本当に現場？」

夕暮れの路地裏の奥から聞こえる雛菊の声。

「俺に訊くなよ。おかしいな、確かに蟲の気配の残留はあるんだが」
雛菊の質問に、頭を掻きながら少々投げやりな感じで答える泰三。
路地裏の地面には、ほとんど乾いた唾液だけが垂れ残っている。

夕暮れの路地裏は、暗闇が広がりすぎて、視界がよくない。

（確かに、蟲の気配は私も感じた。なら、何で痕跡が一つもない？）

人を殺さないで、面白半分に理性の壁を外したのか？ 否

そんな自殺行為な事する蟲なんてそうは居ない。

なら、どうして外す必要がある？……あつ

思いついた。予想出来るのはアレしかない。

「残っているのは移植だな。血痕がない事から察するに、肉体関係で直接しただろうな」

泰三は冷静な口振りで、雛菊が考えていた事を言う。

「それで、どうする？」

このままだと、大将に殴られる。雛菊の素っ気無い言葉に、泰三はすこし眉を細めて面倒そうに頭を掻く。

それは、不味い。そう思うとため息が自然と出てくる。

「どうもこうもないだろ？処理班に搜索は任せるしか　っ！！」

泰三は言葉を途中で止めて、ポケットから黒く細長いワイヤーを取り出して、ワイヤーを装飾している指輪を両手の人差し指と中指にそれぞれ一つずつ嵌める。

まだ距離は遠いが、特徴的な違和感のある気配を感じての、警戒心から来る動作だ。

「雛菊、気づいてるだろ？」

「錬金術師、それも、魔術師の方の…ここは逃げた方が無難だよ」

「そうだな。ここでやり合うのは目立つからな」

よし、ダッシュで逃げよう。意見が合うと、その場から一目散に退散する。

どこかのビルの屋上で走って逃げる雛菊と泰三を映し出している琥珀色の手の平サイズの水晶玉のような球体を白いシルク製の手袋に持つて見据える50歳前後の男性。

顔つきはとても優しそうで、絵に描いたような理想的な老紳士のような風貌だ。

（昨日の今日なので、今回はそのまま見逃しますか。それにしても……）

男性の名前は斉藤。斉藤はそう内心で呟くと、球体を消して眼差しを正面の景色に向けて、すこしだけ目を細める。

遠くを見ているかのような眼差しの先には、遠くに見える山にすこしだけ掛かる黒い雲に向けられている。

（やはり、追ってきますか。レグシア『魔術聖殿』の生粋の魔術師さん）

手袋をした片手を目の前に差し出して、ポルターの規模と範囲を頭の中で想定する。

「厄介事は今は巻き込まれたくないの、そろそろここから退散しますか」

とても優しそうな柔らかい口振りでそう言う斉藤　想定を決める。

（空間と空間を繋ぐドア。縦に長い長方形の白いドア　具現）

「空間　融解」

呪文みたいな言葉。その言葉をキツカケにして、目の前の空間が螺旋のように歪んで、目の前に白いドアを具現される。

半歩先に具現されたドアは、空中に浮かんでいて、現実では到底予想出来ない事が、斉藤の目の前で起こっている。

その現象は怪奇現象と呼んでいいモノだ。

これが、ポルターの力の性質『怪奇を現実に具現する力』そして、斉藤が『魔術師』と呼ばれている由縁。

白いドアの具現を確認すると、紳士服みたいなスーツの中から4センチ正方形型の四角い空き瓶を取り出す。

その空き瓶は先ほどまで確かに中身があった。だが、消失した。

等価交換　錬金術にはそんな言葉が存在している。

代価を支払う事で、それ相応のモノを得る事。

斉藤は錬金術師だから、先ほどまで中身があった空き瓶は、目の前に具現した白いドアの生贄、交換されたのだ。

「ふむ、昨日手に入れた蟲が寄生していた右脳が完全に消えてしまったか。やはり、今度から骨にしたほうが持ちはいいですね」

新しい自分自身に対しての意見。斉藤は柔らかい口振りで言うと、空き瓶をその辺りに投げ捨てて、白いドアの向こうに消える。

空き瓶はその辺りに落ちた瞬間割れて、白いドアは空間から消失する。

>>4<<

斉藤が白いドアの向こうに消えた同刻、『真珠縁』と呼ばれている森の中は草木が隙間なく生い茂っている。

雰囲気は樹海を思わせるような、暗くてジメジメしていて、何だか亡霊の類なのが出てきそうな程の薄気味悪い感じだ。

その森の中心に、草木のない場所がある。

何も生えていない、まるで火事でもあったように、地面は軽く焦げている。

焦げた地面は、上空から見ると黒魔術なのでよく使用される五つ星の形の模様に見える。

「たくつ！『無間』の糞野郎はどこに隠れてやがる！？」

原色の紫色の全身フード姿の一人が、高慢な声を張り上げながら、焦げた地面を何度か蹴り飛ばす。

何回か蹴ると、顔を隠している原色の紫のフードが風に吹かれて、背中に垂れ落ちる。

短髪で紫の髪。短髪の髪は何か艶やかで、尖っている。

鋭く目つきの悪く、眉は剃っているのか線が短い。顔立ちにはどこか、誇らしさがある。

『無間』とは、『魔術聖殿』が斉藤を畏怖した名称だ。

「……すこし、うるさい」

傍に立っている赤褐色のフードを全身に被った者が、幼い少女のような細く高い声で注意する。

「お前こそうるせえー！大体、道間違えたのはためーの性だろうがよ！？翡翠」

翡翠と言つのは『魔術聖殿』が一人ずつ付ける名称の事。本名は『魔術聖殿』に入る際に捨てる決まりになっている。

「……紫煙は、納得してた」

紫煙の猛烈な勢いの罵倒に対して、翡翠は冷静に、紫煙を制する。

「まあ、いい……無間の奴は相当近くに居やがるぜ？」

「……破壊、しながらは、探せない」

「チッ！面倒だな。憂さ晴らしにここら一带灰にしといてやるか！」

大きな声で紫煙は叫ぶ。叫びと共に、紫煙の左腕に紫色の炎が纏わり付くように出現する。

その纏わり付き方はまるで、獲物に絡みつく蛇のようだ。

「……火災、禁止」

翡翠はそう言つと、自分の周りだけに、青白い小さな四角形を出

現させる。

この四角形は『灰壁』と呼ばれる世界の元素、四大元素の一つ、火の元素の結界だ。

四大元素は『土、風、水、火』の四つで、それぞれには役割が存在している。

「山火事程度だ。すこし気張れよな!? 『紫電天承龍』!!!」

最後の紫煙の言葉は、呪詛のようにも思えた。紫色の炎を纏った左手を強く握り締めると、炎を拳の先に集中させて、地面を殴り飛ばす。

炎は地面に触れると放出、いや、爆発して、周りの大気から景色を吹き飛ばすように、紫色の炎は広がる。

放出、爆発した炎は爆風と化し、周りに見える草木、雲はすべて吹き飛んで、燃え尽きて、消失する。

すべてを破壊し尽くした景色に、紫煙は高々と愉快そうに笑い叫ぶ。

「ははは!!! どうだ!? いつ見ても最高の景色だろ!?!」

「……力の、浪費」

翡翠は『灰壁』を融解するように解くと、短く感想にも似た指摘をする。

周りの草木のあった場所からは、紫色の煙が上がり、地面を焦がしている。

「そう言うなや! 俺ら魔術師は、破壊専門だろうが!!! 今更何を加減する理由がある?」

気持ちが高揚し切った紫煙の質問に対して、翡翠は二文字返事で肯定する。

人外で世界から外れた我ら魔術師が、手を抜く必要性はないのだ。

「……派手にやると、目立つ」

「人に見られたら、痕跡残らず消せばいいだけだ。お前だって、すべての痕跡を消しただろ?」

自らの手で何もかも。紫煙は翡翠の言葉に対して、翡翠の過去を

引きずり出させるような事を軽い口振りだが、どこか重苦しい口振りで言う。

翡翠は紫煙の言葉に対して、フードに隠れた表情をすこしだけ変える。

閉じた口をすこし結ぶようにキュツ！とするだけ。それだけで、自分自身の意思を伝えられる。

「アレは、お前の性じゃねえよ。すべてアレが悪かったんだよ。殺されて当然の連中だったのさ。あとな」

泣きたければ泣け。俺達にだって意思はある。俺に似合わない事を言った。

紫煙がそう似合わない言葉を言うと、自嘲気味に

（あーあ、俺らしくもねえな！）

内心でそう叫びながら、踵を返して街向かって歩き出す。

翡翠は紫煙にそう言われると、赤褐色のフードに隠れていない口元が、すこし柔らかく変化させて、紫煙からすこし離れた位置で、一緒に歩いていく。

題目「行けないホームパーティー前編」

>>0<<

5月5日の午前11時半。

まだ、処理班はあの路地裏で移植を行った蟲の所在を掴めないでいる。

その知らせは、随時狩人達に伝達されていて、外出してる狩人には携帯で状況をメールで送信といった手法で行われている。

寺の内部　雛菊の鉄臭い部屋の中、廊下側から見える襖には、黒い影が浮かび上がっている。

黒いシルエツトは、何か鋭利なモノを掴んでいる。

雛菊が握る黒い竹製の鞘と柄には、何か鳥のような家紋らしき紋章が刻まれていて、刻まれた部分は金箔で装飾されている。

長さは70センチ程の片刃刀で、『脇差』として鍛えられた日本刀だ。

生気溢れる一振りなので名前はよく覚えている。名前は『紅霞』
紅シリーズの一つだ。

紅シリーズって言うのは、勝手に呼んでいるだけで、みんな素晴らしい名刀だ。

雛菊は毎日欠かさずに、すべての刀の手入れをしている。これは、雛菊なりの刀との信頼関係みたいなモノを築くために行っている。

刀と信頼関係を築くため　誰もが疑問に思う言葉だ。

だけど、雛菊は疑問とは思わない。古い映画が何かに、こんな台詞がある。

『この銃は俺の相棒で、決して俺を裏切らない』刀の手入れをするのと、同じ慣性を持った台詞だ。

だが、それはただの方便で、実際は明確な理由があつての事だ。いざという時に、切れ味が鈍っては困る。斬れない刀はただの無価値のボンクラだ。

そう

（昔誰かに言われたな）

そう思うと、誰に言われたかを思い出そうとする。

（優しく、温かい感じの声）

声までは思い出せる。だけど、そこから先を思い出そうとすると、脳髓から火山の噴火のような頭痛が一瞬だけ起こる。

一瞬だけの頭痛。だけど、思い出そうとする思考を断線するには、とても効果は絶大だ。

反射的に、片手で強く、片目を押さえる。そして、不思議と悲しい気持ちになる。

悲しいあまりに、涙が数滴、瞳から流れ落ちて頬を伝わる。

（いつも、そう）

自然と言葉が脳裏に浮かぶ。

（何で、こんな、悲しい気持ちになる？）

疑問、脳裏を遮るように横切る。

（なぜ、こんなに……）

この先の言葉は途切れて、終わる。

涙は止まり、悲しい気持ちも消える。そして、日本刀『紅雪』の柄を握り締めて、そして。

紅雪の刃を自分の首に密着させて、思いっきり前に引いた。

自傷行為とも思えるその行動は、鬱な気持ちになるとよくする。

傷は付かない。理由はある。確証は決して出来ないが、紅雪には代々こんな伝説がある。

『我を振るうに相応しい器のモノ、相応しい器と我が認めたモノ、決して、我は傷は付けない』

本当かどうかは定かではないが、実際に、私の首筋は切れていない。確かに、首を掻く切るつもりで切ったのに。

本当に、子供の頃から世話好きな『紅雪』

そう思うと、不思議と微笑してしまう。

笑う時は、出来るだけ笑顔に　誰が言っただか思い出せない言葉。

私はその言葉に従って、出来るだけ表情を柔らかくして笑うように心がけている。

紅雪を天井に掲げて、感謝しているかのような声色で、一言「これから、一緒に」

>>1<<

5月3日の午前4時。

どこかの県の山奥に位置する教会……外見からしてすでに廃墟だろう。

闇は不気味に辺りを包んでいて、別の世界に迷い込んだような感覚だけを感じさせる。

教会の前に佇む赤褐色のフードと原色の紫色のフード。

紫色のフード姿の男性の名前は紫煙、赤褐色のフード姿の少女の名前は翡翠。

二人は『魔術聖殿』の魔術師だ。

「おい、本当にこんな場所に『無間』が居るのか!？」

紫煙はフードで隠していた顔に掛かったフードを背中に垂れ下げながら、大きな声で言う。

「……生存、確認」

翡翠は素っ気無い細くすこし高い声で答える。

赤褐色のフードの中から、細い両腕を左右に伸ばして、短く

「鬼巽、大気隔離」

詠唱の言葉を短く発すると、左右に広げた両手で、空中に『恒星』と呼ばれている文字を刻む。

「風流、知立、火流、水流、束縛」

刻んだ文字を粒子レベルまで分解、放出する。

「無間壁、『制令壁』」

周りの空間を薄い赤褐色の霧で包み込み、正方形の形をした『箱庭』を具現する。

これは、『ポルター』の力と似ているが、違う。これは、人を超越して、手に入れた生粋の力。人外の力。

結界が完全に外気と遮断された事を確認すると、紫煙は待っていたといわんばかりに、叫んだ。

「おらああ！出てこいや！！無間！！！」

壮絶なまでの怒鳴り声に、大気が振動する。

その声は、教会の内部さえも振動させる。『言霊』と呼ぶべきだろうか。

教会内部には、紳士服のような白いスーツ姿50歳前後の男性が、静かに教会の入り口の方に顔だけ振り返る。

「やれやれ、騒がしい人達ですね」

怒鳴る声に対して、優しい口振りで感想を率直に述べて、踵を返して、教会の入り口に歩いていく。

古びた扉は、軽く押すだけで外れて、倒れる。

「やっと見つけたぞ。無間の錬金術師・斉藤！！！」

歓喜の雄叫び。紫煙は視界に入った『錬金術師』の斉藤を見た瞬間、全身に紫色の炎を発生させて、自分の半径1メートルに炎をリング状に構成する。

（紫色の方は敵意剥き出し、赤褐色の方は敵意を感じない）

冷静に周りを確認する斉藤は、内心で相手の第一印象を整理する。追ってに対しては、それなりに予想はしていたが、予想外だった。あまりにも、未熟過ぎる。そんな予想の外れ方だ。

「この程度なら、簡単に逃げれそうです」

柔らかくニツコリと笑みを浮かべながら、斉藤は余裕に満ちた言葉を言う。

その言葉に、紫煙は激怒する。

「逃げられるだ！？翡翠、決めたぜ！こいつは灰も残さないで殺すぜ」

激怒した紫煙は、さっきとは違う感情的な物言いから、急に冷静な物言いに変わる。

翡翠は、黙って上下に頷く。

「やれやれ、物分りが悪い子供達ですね。わかりまし」

斉藤の言葉を途中で止める。紫煙の紫色の炎は槍のように尖り、幾つにも分裂しながら、斉藤の体を360度死角なしで貫く。

「これくらいで、私を殺す気ですか？」

何処かから聞こえてくる斉藤の声。その声が止まると同時に、紫煙の目の前に居る斉藤が霞んで、消える。

消えた！？

頭を疾走する強烈な疑問。

いや、これは！！

一つの答えが脳に響き渡る。

「はっ！『ポルター』か？だが、こんなモノで俺の紫電の炎は、逃さないぜ！！」

涼しい顔で後ろに立っている斉藤に向けて、紫色の炎は、今度は槍から鞭に変化させて、斉藤を四方八方から襲わせる。

紫色の炎に囲まれた斉藤は表情を変えずに、無造作に片手で横薙ぎしてみせる。

斉藤の片手が振るわれた次の瞬間、紫電の炎がその場から消失する。

（馬鹿な！？こいつ、何をしたんだ？）

想定外の光景と結果に、紫煙は今まで感じた事のないインスピレーションが体中を疾駆する。そして、今まで感じた事のない興奮と悦びを得た。

「もしかして、君達は私の過去の経歴を知ってないんですか？」

「そんなもん、知る必要はないだろ？どうせ、お前はここで死ぬんだからな！」

「無知な事は愚かですね……私が、単に逃げ回っていただけだと考えているんですか？」

斉藤は片目を覆うように片手で表情の半分を隠す。そして、周りの大気を支配する圧倒的な威圧感と殺意を体中から放出してみせる。

そのあまりの威圧感に、驚愕の色を浮かべてる紫煙の思考は、一瞬だけ完全に停止する。

「おや？これくらいで気圧されたんですか？実は、私はね、争い事が嫌いなんです。だから、もうやめ」

「ふざけんな！！」

斉藤の言葉を遮る紫煙の必死の叫び。紫煙は今だ嘗てない怒りを覚えて、その矛先は斉藤に……いや、この無間と称された錬金術師に向ける。

「残念ですね。では、その体の機能を沈黙させますか」

静かな声が聞こえると、斉藤は紫煙達の眼前から消失、いや、増えた。

目を疑うような光景。幾人にも分身した斉藤が、紫煙達の周りを取り囲んでいる。

「何だよ？これは……」

「……ポルターの、力」

戸惑う紫煙と、冷静に分析する翡翠。

（これは、中々のコンビですね）

幾人にも分身した斉藤の本体は、内心で関心の色を浮かべる。

だが、それと同時に『無間』は紫煙達には酷過ぎると思い、分身した自分自身を消し去る。

この無謀とも余裕とも取れる斉藤の行動に、紫煙と翡翠は驚く。

「君達はあまりに無知……今殺すには、少々心が痛むのですね。ここでさよならです」

斉藤は優しい口振りでそう言うと、片手に紫煙の『紫電の炎』を球体として具現してみせて、翡翠の張った『箱庭』に紫電の球体を投げつけ、破壊する。

（こんな、事が……）

言葉にならない思いは、紫煙と翡翠の二人のモノだった。ここで、斉藤はある事を思いついた。

「いい事を教えましょうか？狩人の中に刹那雛菊という名前の少女

が居ます。その少女を見事倒したら、私は素直に君達に殺されてあげますよ」

さよなら、『魔術聖殿』の魔術師達。斉藤はそう言い残すと、煙のように消えてしまう。

最後に斉藤の言い残した言葉は、紫煙達には好都合なモノだった。迷う余地はない。紫煙は愉快そうに笑い、翡翠は壊された『箱庭』を無言で消し去る。

「嬉しい限りじゃないか。よっしゃあー！今すぐその刹那雛菊って奴を殺しにいくぞ！」

紫煙はそう叫ぶように言うと、その場から翡翠と共に歩き去っていく。

そして、廃墟の教会には、いつもと同じ、静寂な空気が戻る。

「行けないホームパーティー中編」

>>2<<

5月4日の午後12時半過ぎ。

今日は早朝から等身大の宅配便の包みが送られてきた。

この間、こっそりと通信販売『買え買え達人』に注文していた。

包みの内装は無造作に取り出す。中身は身長約170センチ程度の人型サンドバッグ。

そのサンドバッグを横では、呆れた眼差しの泰三の姿がある。

（雛菊はロクな買物しないな……それに、これ）

ここから先は自然と言葉に変換される。

「意味あるのか？」

呆れから出た疑問を、包みを両手でグシャグシャに潰している雛菊に訊ねる。

雛菊は、何か、馬鹿にするような目で見つめてくる。

「これ、凄いだよ？ 打撃の重さを算出して足元のメーターに表示されて、さらに、反撃モードも付いている優れもの」

誇らしげに説明する雛菊。だが、泰三にはこんな疑問を浮かんでくる。

（サンドバッグが反撃してきたら、サンドバッグじゃないんじゃないのか？）

直接言おうかと思ったが、誇らしげにしている雛菊を見ると、とてもじゃないけど言えない。

下手な事を言えば、変に落ち込むか、変な殺意を持たれるかの2択に絞られるからだ。

俺としては、どちらもご免だ。

まあ、この場で一番妥当だと自分で思う質問を率直に述べる事にする。

「それは、いくらしたんだ？」

大体の金額は予想出来る。このサイズのサンドバッグにいら
ない変な機能内蔵してある事から、きっと高い。

だが、雛菊の回答は泰三の予想よりは。

「4万円」

安かった。俺はすこし、安心した。

>>3<<

5月27日の昼。プロローグ「ドッペル」

昼の正治歩道トンネル。

このトンネルは車道がなく、歩道だけの造りで、トンネルとして
は珍しい構造だ。

幅は4メートル縦6メートル全長は約3キロ半。正治歩道トンネ
ルの『正治』というのは、建設者の名前で、今から6年程前に工事
中に事故死した。

トンネル内は風が通り抜ける音が、トンネル全体で共鳴しあつて、
その音は『怪物か悪魔』のうめき声にも似ている。

中は奥に進むにつれて一層闇の領域を増して、中心部まで到達す
ると、その闇の領域は奈落の底を思わせる。別格のモノだ。

最近では、この正治歩道トンネルのある奇妙な噂が流れている。

幽霊が出没する。その霊はまるで、『鏡に映ったもう一人の自分
自身』だと言う奇妙な噂だ。

そして、その噂の結末は『消失』。

>>4<<

「店長、コーヒー『ブレンド』」

喫茶店『カーネル』の鐘付きドアを開いて入ってきた雛菊は、入
ってきて早々注文を口にして、カウンターのほうに座る。

店内はアンティークな内装で、和風のテーブルと洋風の古いタイ

ブの椅子が、不思議な程ベストマッチしている。

最近、通うようになった場所だ。

「雛菊ちゃん、ブレンドの味をすこしアレンジしてみたんだけど、試飲してみる？」

店長はまだ40歳前半で、顔立ちは何だか、和まし系だ。

簡単に言えば、あまり特徴のない顔だ。

「飲む」

私、ブレンドしか飲まないし。雛菊はやる気のなさそうに答える。線の細い声には似合わない、男混じりの女言葉。

それで、すこしばかり会話は止まる。店内に置かれている古い木彫りの振り子時計の時を刻む針の音だけが店内にBGMとして流れる。

耳障りでもなければ、良いとも思えない。不可思議な気持ちにさせる時計の音。

（喫茶店の他に骨董屋も開けば良いのに）

きっと、儲かる。この喫茶店に居ると、いつもそう思ってしまう。

コーヒーを淹れるコーヒー豆の何やら香ばしい香りが店内の空気と混じって、コーヒー専門の喫茶店特有の匂いになる。

「はい、どうぞ」

店長は、洋風の上品で、純白のコーヒーカップに3分の2程コーヒーを淹れたカップを雛菊の前に差し出す。

雛菊は何も言わずに差し出されたコーヒーカップの取ってを片手で掴んで、すこしだけ吹いて、ちよつとだけ冷ます。

何度か吹いたところで、すこしだけ口の中に流し込む。

すこしばかり、啜るように飲んだところで、コーヒーカップの力ウンターのテーブルの上にゆっくりと置いて、感想を述べる。

「香ばしさは良くなってる。けど、甘味と苦味がすこしだけ、バランスが崩れてる」

簡潔に纏めた言葉で、指摘だけをして、コーヒーを啜っていく。店長はどうも、何かを考える。ブレンドの指摘された場所をどう

バランスを保たせるか悩んでいるのだろう。

だが、雛菊は助言はしない。助言の言葉なんて、持ち合わせていないから。

「まあ、それでも美味しい事には変わりないけど。周りの店のコーヒーよりは段違いに近いし」

雛菊はすこしだけ慰めみたいな言葉を口にする。

（変に気落ちして、不味くなってもらうと困る）

本心では、ただブレンドコーヒーの味が変わる心配をしているだけだった。

雛菊の言葉に、店長は喜んでいいのか……微妙な気持ちになる。

そして、自然と苦笑いを浮かべながら。

「どうも、ありがとう。雛菊ちゃん」

「前々から言おうと思ってたんだけど」

雛菊はすこし言葉の途中で一旦切って、短く。

「その『ちゃん』付けはやめてくれない？」

>>>5<<<

5月4日の午前1時過ぎ。

どこかの廃墟ビル群に響き渡る。斬首の音と、生体を切り裂く風の音。

黒いジャケット姿の雛菊の片手に掴む『紅雪』の刃にこびりつく鮮血の赤い血痕と、すこし離れた場所で、灰色のスボンの両ポケットに手をつっ込んでいる泰三。

周りの空気は血生臭い。それもそのはず。二人の蟲の死体が辺りに転がっているからだ。

蟲の一人は刀で斬首されて絶命。一人はワイヤーで体を何等分にも分割されて絶命している。

赤い鮮血は廃墟のビル群の地面や壁を濡らして、殺戮の現場と化している。

雛菊は紅雪を掴む片手を近くの壁に向かって横薙ぎ。横に振られた刃は壁を破壊して、こびりついた血を剥がすように振り払う。

「どう思う？コレ？」

「どうもこうもないだろ……出来すぎだ」

二人は言葉をすこし濁しながら、短いやり取りをして、刀を鞘に収める。

畏怖と、矛盾感を深く感じる雛菊と泰三。雛菊は舌打ちし、泰三のその辺りの地面を蹴る。

「増えたら襲い、少なくなったら身を隠す。これじゃあ、ただの消耗戦だ」

愚痴を零すように、泰三は唐突にそんな事を言う。

「そうね……さっさと移植し回っている蟲を見つけて、殺さないとこっちが先に参るかもね。でも、これって本当に一人の蟲の仕業？」

「……異常だよな。この繁殖の速度は。組織でもあるのかね？」

泰三と雛菊で、すでに併せて30人以上は殺している。その多さは異常な程だ。

怪訝そうな様子の雛菊は、何か深刻そうに考えを巡らせる。

考える程の情報などは持ち合わせてはいないが、ある程度の仮説は考えられる。

だが、ある程度の仮説はどれも組織とか仲間とか、グループで行われているとしか考え付かない。

だが、そんな仮説は実際には役には立たない。

「もう！」

踵を返しながら雛菊は言いかけて、止める。何かが近づいてくる気配がしたからだ。

殺意の塊のような気配。泰三は近づいてくる気配に対して、ワイヤーの装飾した指輪を嵌める。雛菊は鞘から再び紅雪を抜刀して、鞘をその辺りに捨てるように投げる。

近づいてくる気配は、目の前まで近づいてきた。

原色の紫色のフードの男と赤褐色のフードで顔を隠した少女。

「よお！俺は『魔術聖殿』の紫煙だ。刹那雛菊って奴は居るか？」
紫色のフード姿の男は、紫煙と名乗る。傲慢な口振りだ。

『魔術聖殿？』泰三と雛菊は最初にそう思う。そして。

「まあ、どっちでもいいか！どうせこの場で死ぬんだからな！！」
紫煙はそう叫ぶように言うと、片手が紫色の炎に包まれる。

そして、炎を纏った片手を握り締めて、地面を殴る。

殴られた地面は砕けるように潰れ、雛菊と泰三の立っていた地面の周辺が爆発する。

紫色の煙が濛々と上がり、周辺は爆煙に包まれる。

あっ気ない。紫煙はそう短く呟いた。その直後、紫煙の横から風を切る音だけが聞こえてくる。

紫煙は風を切る何かを炎を纏った片手で弾くと、楽しそうに笑みを浮かべる。

爆発を後ろに跳んで避けた雛菊と泰三はすこし服が焦げただけの無傷だ。

「そうだよな。簡単に死なれちゃあー興ざめだからな。楽しく殺し合いしようや！！」

幕を開く紫煙の言葉が、廃墟のビル群に響き渡る

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5356a/>

サイクル

2010年10月12日08時31分発行